

間もなく夜が明ける。

これから始まる一大作戦にA R A s各員はそれぞれの持ち場へとスタンバイしていた。

「魔女」竜胆麗華も自らのエゴシエーター能力を解放すべく、独自の持ち場へとワープする。

そして、夕星自身も〈エクステンド〉のコックピットシートに身を預けた。

「頼りにしてるぜ、〈エクステンド〉」

操縦桿に触れることで、機体を動かすための情報が再び脳内に流し込まれた。ヘッドセットを介した視界も良好。通信系も問題なしだ。

『あー、マイクテス。マイクテス。聞こえているかな神室くん』

ジツというノイズの後に聞こえてきたのは未那月の声だった。

「聞こえていますよ、未那月先生。以前に使っていた変声機はもう使わないんですか？」

『使って欲しいのなら使うぞ。なんなら前みたいなのイズまみれの声じゃなくて、可愛い可

愛い藤森委員長ボイスで応援をしても』

「それは結構です」

彼女もこちらの緊張をほぐそうと冗談を混ぜてくれたのか、それとも単にふざけているだけなのか。そこが曖昧だから夕星もキツパリと断りをいれておいた。

『だったら、少し真面目な忠告をしておこうか。あの蛹の怪獣はフェイズEXのエゴシエーターだ。だから、ここから先は何が起きたとしてもおかしくない』

エゴシエーターに対抗できるのは、同じくエゴシエーターだけだ。従って麗華以外からの直接的な支援も期待できない。

加えて「陽真里のエゴシエーター能力はますます手のつけようがなくなっていくのではないか？」と未那月は予想していた。

『藤森委員長のエゴシエーター能力は端的に言うのなら「無から物質Aを創造するという過程を経て、自身の願いを叶える」ってところじゃないかな?』

言うなれば、それは夕星のエゴシエーター能力の完全上位互換であった。

夕星が〈エクステンド〉の武器を構築するためには、一度砂塵へと分解するための原料が必要になる。対して陽真里のエゴシエーター能力にはそれが不要いと言うのだ。

そうなれば必然的に能力の制約も緩み、現実には齎す影響だって大きなものと化する。

「それでも……例え、何が起こるのか分からなかったとしても、俺はヒバチを元に戻してみせます」

夕星はハッキリと答えた。今更、その程度の脅しで覚悟は揺らがない。

『そうかい。だったら、私からも一つ、神室くんに勝利の秘策を授けておこう。一度しか言わないからよく聞くんぞぞ』



『——と言うわけだ。要は神室くんの想いをしっかり届けろってことだね』

「はは……最後はだけはチープな言葉でまとめるんすね」

夕星は提示された秘策を聞き入っていたので、思わず最後の締め方に呆れてしまった。

だが、未那月も発言を撤回するつもりはないらしい。彼女は大言を謳うように続けてみせる。

『自分の意思を表明することのどこがチープなものか。君が藤森委員長に抱える感情は「恋心」と言うには重く、複雑なように見受けられる。だが、それだけ重く、複雑だからこそ、その想いをぶつけた衝撃もまた大きなものになるのさ』

それでこのふざけた「非日常」に打倒し、陽真里を元の日常に戻せると言うのなら、自分は全力で拳を握ろう。

操縦桿を一際強い力で握りしめ、夕星は軽く呼吸を整えた。

「ふう……」

思考はなるべくクリアーに保て。今はただ作戦を果たすことだけを考えろ。

蛹の怪獣を打倒し、広がる砂塵化を止める。——そして陽真里の「日常」を取り戻すのだ。

『それじゃあ、そろそろ作戦の時刻だ。A R A s 構成員・神室夕星。君の健闘に期待する』  
整備区画の天井がゆつくりと開き、へエクステンドを固定したハンガーが上昇を始めた。

「電圧チェック。油圧チェック。」

夕星はコックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと押し込んでいった。歯車状の瞳に、躊躇いの色は混ざらない。

「エンジン回転数・正常ノーマル。関節機構ロック解除。現実固定値リアルタイムセンサーをアクティブモードへと移行」

ハンガーは完全に上がり切り、へエクステンドへは地上へと立たされた。

砂塵化の影響によって軒並みが砂に呑まれた天川市あまのがわからは、夕星の知る街並みも消えていく。

そして、朝日が淡々と広がる荒野と、最奥に見えるのが巨大な蛹を茜色に照らし出す。

その姿をキツく睨みつけ、夕星は踏キック板ペダルを踏み込んだ。

「さあ、いこうぜ〈エクステンド〉ッ！」